

県研究主題

学習指導要領の内容を踏まえた教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

提案1

提案者 松永 忠弘（湘三地区）

<研究主題>

学習意欲の向上や家庭と連携した学習習慣の確立を図る教育課程の編成の工夫・改善
～一人ひとりの子どもの学ぶ意欲を高める教育活動の工夫・改善～

1. 提案内容

学校創立1年目。校内授業研究を柱に児童の「意欲」に焦点をあて、授業実践を積み重ねてきた。また、「家庭学習」を媒介として、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣を確立することができないかと考え、各学年で取り組んできた。

(1) 「学習意欲の向上」を図るための教育課程の編成の工夫・改善

① 子どもの姿に学ぶ校内授業研究

「教師が変われば授業が変わる。授業が変われば子どもが変わる。子どもが変われば教師が変わる。」というサイクルを創り出すことで「学校が子どもたちの成長の場となる」ための授業研究を実践してきた。研究協議会では、常に「一人の子どもの姿」に焦点をあて、その子の「学ぶ姿」を話題にして協議を行った。

- ・研究研修グループ通信「リフレクション」（省察）・・・授業の振り返り
- ・「トーキングサークル」・・・提案・議論・結論の場ではなく、個人の思いや考えを自由に話し合う場

② 児童の「思い」「気づき」を出発点とした教育活動

ア 「どんな学校にしたいか」を問うことから始めた「委員会活動」の創立

児童の「思い」を委員会活動につなげていく。

イ 児童自身が考え創る「卒業式」

「卒業式」を企画、立案する際にも、「どんな卒業式にしたいか」を問うことから始めた。

ウ やらされる「清掃」ではなく自分たちで工夫する「清掃活動」

「清掃」についての目的意識を、「学校をきれいにするため」という目的とともに自分が成長するために、自分で考えて行動するという活動に対する「意欲」を児童の中に形成していく。

(2) 「家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣を確立する」

① コミュニケーションツールとしての家庭学習

家庭学習を媒介にして、家庭との連携を図りながら児童の学習習慣を確立することができないかと考え、各学年でその取り組みを始めた。

② 保護者の「学習参加」の機会を設ける

授業参観や校外学習、行事、掃除の時間などの機会に、保護者の「学習参加」の機会を設ける。保護者と児童がともに学ぶ機会があるということが、ひいては「児童の学

習習慣の確立」につながるものと考えた。

2. 協議内容

創立1年目。貴重ですばらしい報告。保護者の願い・地域の思いが多い中、学校を創るということがはっきりと示されている。日々の授業を充実することが一番。行事に重きをおかず、清掃活動や委員会活動に重さがある。リフレクションに共鳴した。

(1) 若手教師の育成・ベテラン教師の知恵の生かし方はどのようにされているか。

風通しのよい職員を意識している。「トーキングサークル」と呼ぶ職員によるフリートークの機会がある。提案、議論、結論の場でないので、忌憚なく話し合っている。その中で若手も気楽にものが言える。2年目を迎えて、授業では気楽に声をかけてみたり模擬授業をやったりしている。

(2) 資料 P26 学年便りでは、授業のことを保護者に返している。すばらしい。

双方向で家庭からの声も反映させている。

(3) 共通認識を持つまでのステップを教えてください。

一番最初に描いていたものはおそらくばらばら。グランドデザインを描いて子ども達を当てはめていくのではなく、宿題一つ一つでも全体ではないがリフレクションで振り返りながら方向性を創っていった。

(4) 300名位の規模の学校や大規模校の学校がある。規模・土壌等地域がそれぞれ違う。

学校全体の教育課程の編成を今後どのようにしていくのか？

まさしく2年目の課題。協議や助言を参考にさせていただきながら、考えていきたい。思いを大切に活動は特別活動等で1学年の実践を全学年に広めていきたい。地域連携については、地域の方にたくさん来てもらいゲストティーチャーとして行う等共通化できれば良いと考えている。

3. まとめ

(1) 授業をどう創るか

学習指導要領実施2年目。教科書が厚い・内容が多い・学級担任の先生方は大変。時数増になりがち。法律改正をふまえて重く学校現場にきている。総合的な学習については「活動あって内容なし」と言われたこともあった。その反省を受け今回の改訂作業の中で学力をつけなければというものがあつた。教育課程編成においては、時間数に目がいってしまう。提案では、新設の学校。躍動感を感じる。教育のあるべき方向は、一定のものがあると思う。トップダウンからくるものもあるが、ボトムアップで創られたものである。子ども達から創っていこう・・・すばらしいと思う。授業をどう創るか内容の組織化が大切。一人一人の学びがどうだったかにつける。しかし、授業の中には話し合い、まとまりの良い授業になりがちのものもある。これで子ども達は育っているのか？子ども一人一人が育つ授業に目を向けることが大切。活動の中に内容をどう入れるかが大切。時数が足りているから OK ではなく、本当に一時間の内容にふさわしい授業か。教師の指導一つ一つの積み重ねである。

(2) 家庭との連携

双方向、具体的につくられている。教育の本質はどういうところにあるかを示していただいた。バランスが大事。

< 研究主題 >

学習指導要領の内容を踏まえた教育課程の編成と教育活動の工夫改善

— 地域を流れる多摩川を生かした6年間を貫く学習 —

1 提案内容

「創意工夫を生かした特色ある教育活動」に関して「地域の教育資源や学習環境」に着目し、「全教育課程を見通した」取り組みとして、地域を流れる多摩川を生かした6年間を貫く学習に取り組んだ。

(1) 本取り組みの着想点

地理的要素（多摩川河川敷に隣接・多くの種類の植物や小動物が生息・調布堰・東京湾の潮の影響を受ける汽水域の中でも最上流部）、人的要素（かわさき自然調査団・NPO多摩川エコミュージアム・水と緑の研究会・多摩川塾・川崎河川漁業協同組合・学校運営協議会・地域教育会議・父懇会）、歴史的要素（丸子橋・丸子の渡し・中原街道・旧地名・寺社）の3つの要素を生かした6年間を貫く学習として、多摩川学習に取り組んだ。

(2) 多摩川カリキュラム作成について

生活科、総合的な学習の時間の単元計画の中に、多摩川に関わる単元を配列し活動を行う。

1年 体いっぱいを使って多摩川で遊ぶ。

2年 昆虫・植物探しを通じ、季節の変化を感じる。多摩川で見つけた生き物を育てる。

3年 昆虫の特徴や植物のしくみなどを観察していき、自分の課題に沿って活動をすすめていく。

4年 水辺の生き物を中心に多摩川のよさに気づく。命のつながりを感じる。

5年 多摩川の水質をきっかけに、環境について考える。

6年 江戸時代から現代までの多摩川を中心とした地域の歴史を調べる。

(3) 多摩川学習を通じた6年間での児童のすがた

児童は活動を通して、多摩川が好き（1年）→川に向き合う（2年）→さらに向き合うことが増す（3年）→自分たちの多摩川（4年）→大切にしよう、環境を変えていこう（5年）→これからどうやって関わっていこう（6年）というように、気持ちの高まりに変容が見られた。

(4) 地域・保護者の関心を引き、参画を促すための学習の公開

単なる協力ではなく、一緒に参画してもらうために、全学年が多摩川を題材にした学習の公開日「多摩川デイ」を設定した。参加した方々もふるさとを感じ、地域に誇りを持つことができ、参加から参画へと意識が高まっていった。

2 協議内容

(1) 活動テーマが定着している場合の児童の思いをどう考えるか

今回のように多摩川という教材や教師の思いが強く決まっている場合、児童の思いを大切にしながらこの活動にすり合わせしていくためには、児童の学習への動機づけが大切になっていく。そのために、学んだことを発信する活動の時に、上の学年の発表会に参加し、次年度への意識付けを行ったり、新年度になって、児童の具体的な姿や言葉から学習を組み立てたりという工夫をした。

(2) 安全面での配慮はどのようにしているのか

安全対策として、体育の水泳学習（着衣泳）で、実際にライフジャケットを着用して、川で事故にあった時の安全指導を徹底している。また、水量が多い時の多摩川に出かけ、川の危険な様子を見せることで体験的に指導している。

(3) どのようなシステムで活動を広げているのか

ワーキングチームで担当になったメンバーがプランニングし、中心となって活動を展開している。一度に全ての活動を開始したのではなく、一つひとつの活動を大切にしながら、広げ増やしてきた。また、学習支援ティーチャーの活用も図った。

(4) 活動を継続していくための方策、工夫

教師から教師へ、ノウハウの伝達をスムーズに行うために、次年度に向けて、各学年に元の学年教師を1人残すように人事面での工夫をしている。

4 まとめ

(1) 3つの魅力ということ

① 学校の“核”というものがあるということ

そこから派生するエネルギー、人脈、つながりを大切にし、活動に高めていくには、教師の“やらんかな”という意気込み、周到な計画が必要である。

② 子どもたちが育っているということ

子どもが発する言葉には、その言葉の根拠となるような体験が必要である。感動が実感となり、言葉や表情が彩られていく活動が子どもの根拠となるのではないだろうか。また、積み重ねた学習であることで、教師が見通しを持つことができることも、子どもの育ちと関わっている。

③ 地域の特性を生かしているということ

地理的要素や歴史的要素は、時間がたってもあまり変わらないが、人的要素は変化するものである。だからこそ、積極的な連携を図りながら、地域の人材を大切に生かしていくことが大事となる。

(2) 課題

生活科や、総合的な学習の時間だけでなく、様々な活動の場面で生かされていくことが大切になってくる。そのために、例えば、道徳やキャリア教育、国語科など、横のつながりを意識しながら教師が意図的につなげていくことが大事であろう。各教科の特性を生かしつつ、それぞれの糸を紡いでいくところに、その学校らしさが生まれてくるのではないだろうか。地域教材を子どもたちにとって豊かな教材にしていくのは、教師の大切な役割である。

全体会のまとめ

- ・活動する子どもの姿を見て活動を作り上げていくには、それを見取る教師の力量に掛かってくる。その貴重な作業の中に、6年間を通した学習が出来上がっていく。
- ・地域の方も楽しめる活動を提供すること、双方向の交流を大切にすること、色々な情報を共有することで地域の協力を得られ、かえって教師の負担を減らせるのである。
- ・学習意欲を高めるには、子ども自身が自己決定していくことが大事である。